

「おばあちゃん、ありがとう。私、看護婦さんになるよ。おばあちゃんみたいな病気の人を優しくお世話する看護婦さんになるよ」

息を引き取ったばかりのトミさんの顔を温かいタオルで優しく撫でながら、お孫さんはトミさんに話しかけました。

20年近く経った今も、鮮明に記憶に残るシーンです。僕がこの仕事で初めてかかわった「人の死」でした。

一本の電話と突然の宣告

デイサービスで働いていた当時、トミさんとかかわりは一本の電話から始まりました。

「近所に住んでいる者ですが、母のおむつの当て方を教えていただけませんか……?」。状況がつかめず、とても焦った様子だったので、詳しい話を聞こうとすぐにお宅に向かいました。

トミさんは92歳。これまで元気にひとり暮らしをしてきた方がなりました。10日ほど前から急に食欲がなくなり、ぐったりして歩くこともできなくなったそうです。病気をすることもなく、かかりつけ

認知症の人が 最期まで「生ききる」暮らしの支え方 +10+

それぞれの「ありがとう」

介護の仕事で初めて接した「人の死」。そこから筆者が学んだものは、日々のかかわりの先にある、温かな最期でした。

文 | 黒岩 尚文 (共生ホーム よかあんべ 代表)

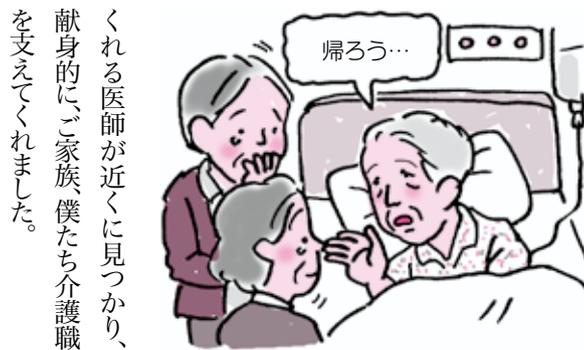
のお医者さんもいません。急なことでだったので、鹿児島市内の国立病院に連れていきました。

診断は脳頭部がん。かなり進んだ状態で、高齢のため手術は難しく、残された時間は10日あるかどうか。医師は、「自宅に帰っても時間の問題。このまま入院をしたほうがいい」と言います。あまりにも突然のことで、娘さんたちも医師の言うことが信じられない

という顔をしていました。

病室のベッドに横たわったトミさんは、小さな小さな声で「我が家に帰ろう。我が家に連れて帰ってくれ」と何度も言われたそうです。「残された時間は少ない、お母さんの言うとおりにしよう」と、娘さんたちは退院を決定しました。

こうして自宅での介護が始まりました。幸い、快く往診をして



くれる医師が近くに見つかり、献身的にご家族僕たち介護職を支えてくれました。

揺れる気持ちと医師の支え

僕たちにとっても初めての経験で、何をすれば良いのか、何ができるのかもわかりませんでした。1日に何度もヘルパーさんと一緒に自宅へ伺いました。足をさすったり、手のマッサージをしたり、顔を拭いたり、できることをやるしかありません。娘さんたちも、母親の希望を叶えようと自宅に連れ帰ったものの、不安の表情は隠せませんでした。「やっぱり入院させておいたほうが良かったのでは……」と何度も気持ちが揺れました。そのた

びに医師がすっかりご家族の話
を聞き、「ゆつくり見守っていき
ましょう」と言いました。

トミさんの最期

トミさんは、痛いとも痒いとも
言いません。わがままは何も言
われませんでした。僕たちが清拭
をするたび、小さなかすれた声で
「ごめん、ありがとうなとおつ
しやるのです。「もつとわがまま
言つてください。痛いところがあ
れば言つてください。そんなに我
慢しなくていいんですよ」とお伝
えしても、トミさんは穏やかな表
情で「ありがとうな」と繰り返し返
されます。

「なんて強い人なんだろう。な
ぜ苦しいときに、こんな優しい感
謝の言葉を言えるのだろう」と
不思議でなりませんでした。

トミさんの呼吸が少しずつ変
わつてきました。おしっこも出
ません。お通じの色も変わつて
きました。ゆつくりとゆつくり
と、長い人生の幕を閉じようと
しているのだと、僕たちにもわか
りました。

医師は娘さんたちに、「遠方の



ご家族がいれば、連絡してあげ
てください」と言いました。翌々
日、息子さんたちが福岡から到
着したのを確かめたかのような
タイミングで、トミさんは眠る
ように息を引き取られました。
自宅に戻つてから1週間が過ぎ
ていました。

「おばあちゃん、 ありがとう」

医師の最後の確認後、娘さん
たちが温かいタオルで優しくて
いねいに身体を拭きました。二人
の娘さんは何度も「おばあちゃ
ん、ありがとう」と繰り返しまし
た。当時小学5年生のお孫さん
も、手や胸、首回りをゆつくり

とていねいに拭いてくれました。
そして耳元で、「おばあちゃん、あ
りがとう。私、看護婦さんにな
るよ。おばあちゃんみたいな病
気の人を優しくお世話する看護
婦さんになるよ」と話しかけま
した。

瞬間、トミさんが穏やかに微
笑んだようにも感じられました。
身体を拭いたり、髪を櫛でといた
り、薄化粧をしたり……。それ
ほど長い時間ではなかったと思
います。しかし、ゆつくりと穏や
かな時間でした。

トミさんが 教えてくれたこと

僕はこのとき、介護の仕事でか
かわつた人の死に初めて直面し
ました。今でも、トミさんの自宅
の様子やご家族の様子、記
憶に焼きついています。この仕事
を続けていくなかで、ずっと僕の
記憶に残り続けるシーンの一つ
です。

出会つてからわずか1週間。何
ができたわけでもなく、今、振
り返つても専門職としてやった
こと、専門職だからこそできた
ことは何も浮かびません。

ただ、それまで僕は、人の死は
悲しいもの、寂しいもの、つらいも
のとはかり思っていました。しか
し、トミさんの最期を前に「それ
だけではない」と知りました。確
かにお別れは悲しい。でも、そこ
には何とも言えない温かな空気が
流れていました。

旅立つトミさんから、それを
そつと見送るご家族から、そして、
縁あつてかかわつた僕たちから、
自然と互いに「ありがとう」とい
う感謝の言葉が交わされたので
す。静かに幕が降ろされたトミさ
んの人生劇場に、わずかな時間
でも出演させてもらったことに
感謝しています。

僕たちがかわる高齢者は、
誰もが最期を迎えます。最期は、
人の生きていく線（人生）の上の
最終地点であり、「看取り」も介
護者としての日々のかかわりの
延長線上にあるものです。決して
特別なものではありません。そ
れは、認知症の人であつても同
じです。

だからこそ、1日1日、一瞬一
瞬の目の前の人とのかかわりを
大切にしなければならぬと、ト
ミさんが教えてくれたように思
えます。